

一葉恋慕 (一一)

多谷昇太

そのことに気付くや私は肩で大きく息をして高ぶる気持ちを抑えた。そして無理にでも好々爺的笑みを浮かべては専ら彼女の言辞を待つ風をする。貴様の身の上などどうでもいいと自らに毒づきつつである。もとよりそんな私の促しなど待つまでもなく、

自らの身に起きた不思議をこそ彼女は一気に述べると思つたがそうではなかった。「まあ、車夫を？そのお年で。そして今は宿無しなのですか？この冬空に：それではさぞやお困りでしょう」と今の私の窮状をこそまず気づかってくれたのである。金の切れ目が何とやらで、身代の傾いた者や、まして私のような、プーターロー、など普通は誰も相手にしない。はしなくも袖する縁でかく会話するに至つた私への、形ばかりの思いやりとも見えたが、一葉の語調にそれはなかった。男女、年の差から見てこんな折りに

は（と云つても普通、こんな折り、などあるだろうか？）取るべき自らの節度というものがあるだろうに、堪え性なく私は思わず感極まつてしまった。車上生活に陥つて以来すっかり人間不信、社会不信に

はまつていた私にとってこれは予想外で、手負いの獣のごとく端にも掛からない、所謂、どうしようもない奴、となつていたに違いない自らの様とも思えなかつた。久しく人の温みを忘れていた、いや拒否していた私の、思いも寄らぬ人恋しさへの回帰というものである。しかしもし此処で涙ぐみなどしたら私は自分で自分を殺しそうだ。

必死になつて自分を立て直し、誤魔化し笑いを浮かべては「いやあ、ははは。宿無しと云つても何とか伝はあるのです。どうも要らぬことを云つてしまつて申し訳ない。そんなことよりあなたの事です」と私は彼女の今の状況に話を振つた。今を明治と偽つてまで彼女との奇跡の共有を欲した私の言とも思われなかつたが、しかしそれ程に私は自分を崩されるのが嫌だつたのである。偏屈な自我の殻、他者否定の世界観を貫くことがこの困難を生き抜く上での糧となつていたのかも知れない。

しかし改めてその時代ワープの視点から彼女を見れば不思議なことが二、三あった。木々の生茂つた公園とは云つても樹間からは行き交う車の姿が容易に覗かれ、その騒音もあつた。ゴッドファーザーの旋律を一杯に鳴らした族の車両も先程一台通つたし

、大きなバスも通ればトラックも通る。にも拘らず彼女に驚く素振りは全くない。第一気付いてさえいないようだ。更に言わずもがな、まだ煌煌と明かりのついた街のネオンやビル群なども全く意に介さないでいる。明治からワープした人ならこれはあり得ないはずだ。してみると彼女の耳目には私とその周辺しか写っていないことになる。わずかに周囲十五、六メートルの結果にいろがごとしである。プーターロー、とは言え最前より私は彼女に温かい缶コーヒ―か何かを買って差し上げたくて仕方ないのだが、一旦この結果を出してしまえば彼女が消えていなくなりそうで果たせそうもなかった。今の奇跡を惜しめばこそこの出会いのゆえを探る他はない。

「本郷に帰るには…」と云いかけて私は口を噤んだ。つまりぬこと（だろうか、彼女にとつては切実だが）を云って時間を失いたくなかった、共有をこそ私は改めて願いつつその為のキーワードを口にす。 「いや、その…あなたの、うもれ木、の事です。とても感動しましたが、しかしどうでしょう、現実にお嬢のような女性がいるのでしょうか？男性から見れば彼女のような女性は理想的です。又世間の規範からしてもそうでしょう。すれば失礼ですが、あ

なたは果してその理想の立場からこれをお書きになつてはいませんか？あなたが本当に立脚するものからではなく、です」一葉の眼が変わつた。私の感想が意外だったのかあるいは何かしら彼女の心の琴線に触れでもしたのか、文字通り膝を詰める勢いで彼女はこう聞いてきた。「ほう、そのような感想を頂くのは始めてです。それでは伺いますがあなたの仰る私の本来の立場とはどういうものですか？私はどう書けば良かったのでしょうか？」邂逅の当初のごとき挑むような、突つかかるような調子に戻っている。私はあなたの敵ではないと指摘して茶を濁すなど今更出来そうにもなかった。言葉を選びながら私は慎重に返事をする。一葉の日記（塵中日記）からして今日明治二十七年二月某日という日がどういう日であつたかを私は思い出していた。件の久佐賀大先生と彼女との経緯をはつきりと思ひ出したのだ。今すべてを知る未来の輩とは云え私はそこからものを云つていいものだろうか？神でさえはすまい。すれば私は柄にもなく年長者の、否、能うなら彼女の亡き父上のごとき慈しみなどを装つて、唯々彼女の感情の吐け口になる他はない。しかし文字通りそんな器量など私にはなかつた、何せ童貞のごとき異性

との交流のなさだ、したがって私の声はふるえていた（もっとも氣迫に押されもしたのでが）。「判りません、何となくそういう氣がしたので。遠慮は要りません、あなたが今思うことを仰って下さい。私はその、受けますから：」そう云う私の目をじっと見ながら彼女は切り出した。「：身を売ることは罪でしょうか？」「えっ？」「お金の為に、自らの本懐を為すために、人に身体を提供するのは間違つておりましようか、どうですか？」まさかいきなりこんなことを聞かれるとは思わなかった。繰り返すが私は確かに55才の年長者だが未だ女性とシリアスな会話などした事はない。どう受ければいいのか、たじたじとしている私の様子を見れば勘のいい女性のこと、直ちに「あつ、この人はまだ女知らずの子供のような人」と受け止めてくれて話題を下げてくれようがところが一葉は違つていた。如何な頓着せず私の返答を待っている。どうも普通の女性の様子とは違ふようだ。人一倍感性に鋭い筈の一葉が私の「男でなし」に氣付かぬ筈はないと思う。よく夢の中では建前がすべて取っ払われて、本音が現れると云うが今の彼女がそのことしだ。すなわち彼女の内の偽我ではない、真我のようなものが現れているとも見

えた。夢の中では毎日の暮しに於ける些細な想念や常識事など、謂ばどうでもいい偽我の類は雲散霧消するのだ。それで云えば先程の私の窮状を慮つてくれた事にしても今と同様に彼女の真我、生地なる本性が現れたまでのこと。その赤裸々な思いやりゆえに私は感極まつてしまったのだろう。しかしもしそれであるならば私も建前なしの本音で応えねばなるまい、意を決めて私は自らの正直な所を開陳する。

「意外なことを聞きました。お嬢とも思うあなた
が、いや、高潔なる樋口一葉が云うこととも思えない。第一：（止めて欲しいの意を込めて）色心不二と申します。どれほど高尚なお心でも身体からの官能の毒は避け難い、そこに墮してしまふ危険もあるし：」ほとんど赤面しながらの云いようで声は上擦りつ放しである。人もあろうにまた話す内容もあろうに、私にはすべてが未設定の、今が男女の切事場で、実に荷が重い。そのわけは重々述べたがしかしそれを云うよりは文字通り一葉の言葉が余りにも意外だったのだ。一葉への聖女像が心の中で序々に崩れて行く。実のところ、要は止めて欲しいのだ、そんな話は、あなたであるならば……。

しかし一葉は承服しない。「ではやはりあなたもお

蝶のような女性を認めるのですか？兄様のために汚れ、そして死んで行つたお蝶は立派であると、そう認めるのですか？」「そうは云つてません」「しかしそうなるではありませんか。もしお蝶が兄様の為でなく自らの為に身体を売つたとすれば、あなたはどうお思いですか。単に軽蔑の対象とするのでしょうか？自らの為に身体を売る私と、お蝶は全く別物ですか。官能の毒などとお為ごかしは止して下さい。毒など百も承知なのです。私は女をこうと決めつけ、人間をこうと決めつけるものに抗いたのです。世に抗いたい。不貞をなさねばそれができぬとすれば私は敢てそうします！私の立場とはそういうことです」と言い放つて彼女はベンチから立ち上がった。まるで私とその不遜な世の中の代表でもあるかのように厳しい目付きで私を睨みつける。今に至る二十三年間（もつともワーブの間の百十年間は省いてほしい）の彼女の人生をすべてぶつけて来るような、実に強い氣迫だった。

それに打たれて暫し言葉を失いながらも、私は今更の様に車上生活者にまで落ちぶれてしまった私自身への世の不条理と、それに対する強い怒り、強い鬱屈を改めて思い出していた。そしてこれもようやく

くにしてと云うべきだろうか、この奇跡の邂逅のゆえを、彼女との仲立ちになつてくれたものへの感謝をうつすらと捉え始めていた。更には聖女云々などという、彼女の小説「わかれ道」に於ける吉三の如き、彼女への押付像を悔いていた。それでは私も世の男どもと同じになつてしまふではないか。日本女性斯くあるべしという押付魔共と。それとあと二事に思いを致す。

「そは（小説を書くことは）女のすべきことか、我は女なり、女なり」という一葉が一時残した言葉と、今に残るかつての婚約者渋谷一郎との逸話である。その渋谷というのは若い頃樋口家の食客で、父が指名した一葉への許婚者、即ち入り婿になる筈の者だったが、その父正義の没落を見て婚約を解消したのだった。しかし後に県知事まで出世した彼が改めて求婚を申し出た時に（養子ではなく、である）小説家への道などに拘泥せずそれを受諾していれば彼女は女としての幸せをつかめた筈だった。もとより母お滝も常々その手のことを望み、すればその母を、また妹邦子をも樂にしてあげられたのかも知れない。しかしであるにも拘らず彼女はそうしなかつた。さなぎが蝶になるのを止められないように、苦

勞の道、棘の道と判つていても本業本懐に生きずにはおれなかつた。更に云えば彼女は身以て「もの申したかつた」のдарう。即ち世に人に、彼女の今の言葉で云えば「抗いたい」、引いては「人の眞の身上と本懐」を示したかつたのに違いない。しかし後者については未だ霧の彼方で、今はもつぱら前者、抗いと実に強いうつ屈、それしかなかつたかも知れない（そしてそれは私も全く同じだつた）。前記のごとく母と妹を何とか楽にしたい、更には樋口家を再興したい、又自らの歌塾を開きたいなどという強い願いがあつたにも拘らず、肝心の金が、資金がなかつた。偶々新聞で目にした株というものに素人の憧れから（無理もあるまいが）久佐賀を訪ねたはいいが体よく「妾になれば云々」と身体を要求されたわけである。金は欲しい、しかし妾となれば自分が常々「うもれ木」や日記に認めて来たことは一体どうなるのか。人に、いや自らに対して申し開きが立たない等等、どうにもならない強いうつ屈に沈まざるを得なかつたのである。しかしそれであるならば尚更渋谷県知事閣下夫人になればいいではないかと人は思うだらうが、「埋もれ木」のお蝶が、「にこりえ」のお力がそれをさせなかつたのだ。思うにそれは第

三者の妾になることより辛かつたのに違いない。ゆえは小説「やみ夜」に明らかだが前記二作品からもそう云う私の意は汲み取つていただけだと思う。又更に他にもあつた。大袈裟に云えば、であるが、一葉より以前の日本のすべての女性達が、即ち男社会に従属させられ続けて来た過去のすべての女達が、彼女に背を向けさせたのдарう。「われは女なり：」に逃げ込むのを許さなかつたとも思う。本業本懐とはそういうことだ。彼女の出来の所以であり、それは真逆のカルマ共々逆らえぬほどの強い力を本人に及ぼす。樋口家の零落がなかつたなら一葉の誕生はなかつたことを人は思われよ。功罪含めすべての事象が、人が本懐を遂げるに於いて、あるいは必要なのかも知れない。ん？…とところで何方か何か云われたか？それならお前は直次郎か、と。さあ、どうだらうか、直次郎なら光栄だが…。まあ兎角、その様な諸々の強い鬱屈の果ての一瞬に何故か時代を超えて、此方は私というどうしようもないプータローと彼女はいま邂逅しているわけだ。彼女にとつては何の意味もない一時としか思われぬが、私に於いては三保の松原の柏陵の体験だつた。はたして出会いの意味は何かあり、そしてそれは啓示されるのだから

うか。とにかく先を急ごう…。

いや、暫し、暫し待たれよ。レクチャーが多すぎて物語への嗜好が削がれようが此処はどうしても方の主人公、即ち私ブータローの経緯を伝えねばなるまい。天地の方やではあるが飽くまでも邂逅物語なのだからどうかお眼汚しのほどを…。

「実は私も…」と云いかけてしかし私は口を噤んだ。一葉に負けないくらい世と人への恨み辛みは山ほどあった。現象だけ言えば私はいま睡眠を取られている。エルム街のフレディどもに取り憑かれている。故あって、ある資産家の極道者に因縁を付けている、その手下どもによる睡眠妨害を受け続けている身だった。もう四年にもなる。アパートに住もうが宿暮しをしようが、(御存知だろうか?) 霊視というやっかいなものを使って何処にでも追いつけて来、フレディをやる。使い魔と云うほかはないこの悪の霊視女や悪ガキどもの前でプライバシーなど一つもなかった。想念にひっ付くので此方の思念さえもすべて読まれてしまう。眠れなければまともに仕事は出来ないし、身も心も自棄になって、遂にはこのよいうな車上生活者にまで零落れてしまった次第。この「霊視」というやつはヤクザに限らず遍く世にあっ

て(謂わば公然のタブー化している)、これに馴染んだ世人は私の事と次第を笑うばかりである。会ったこともない実に少なからぬ連中が「ブータロー」と罵っては蔑み、おもしろがる始末。現実の世は斯く全くオカルトじみている。

とにかく、一円にもならない事に長年月と大金を使う親分何某が居て(件の霊視女二人を含む数名の手下どもを、彼は私への生活妨害に掛かり切りとし、その生活費を工面していた。まともな仕事にも就かず、女を与えられて、ただ遊び暮らせればよいとするこの手下どもも沙汰の限りだが、この親分某こそ、正しく偏執狂以外の何者でもない気違い沙汰というもので、従って私は堪ったものではなかった)、俺の意向に従わねば生活すらさせぬと云っている訳だが、全体それは格差のなれの果て、その弊害とも言うべき現象で、猫がネズミを弄ぶような、一面に於いてそういう馬鹿げた世になってしまっているのだ。例えば一パーセントのイルミナティと九十九パーセントの庶民、勝ち組と負け組、官と民、あるいは正社員と非正規社員など、その格差は其其のレベルで進行するばかりである。建前は知らず、各々の間に於ける差別と横暴、且つ偏見は目を覆うほどに

なっている(俗に云うパワハラ化、体育化している)。その写し絵とも云うべき子供達の世界ではいじめが、また新カーブスト制などというものさえもあるようだ。それで云うなら私はシュドラーで且つネズミだ。私は斯くも悲惨である。

「得たり賢し」とばかりこのような事どもとわが経緯を一氣に一葉に述べようと思つたがしかし止めながらその実身を売る決心を固つていた一葉の辛さと、更にはそれを言挙げのごとく私に明かしてみせた一葉の真摯さを思えばそんな事が出来ようか?ここは一つ、余所衣を脱いでくれた一葉になけなしの男氣を見せる他はない。(以下次号)

「小説返歌」

売女めと罵らば罵りね鳥の世されど遣(おこ)せよ
寝屋と粥、汝が犠牲(にえ)ぞ

オレンジの皮むくごとくをみな実の余所衣(よそい)
はがすはつひになからず

